

学生時代にいただいた言葉

三谷 光雄（教育：昭和49年3月卒）

これまで、同期の同窓会は時折開催していたが、令和元年11月、5期にまたがる卒業生が一堂に会し、恩師を招いての体育研究室0同窓会が開催された。卒業して46年、久しぶりに再会した先輩・後輩に、身も心も学生時代にタイムスリップ、思い出話に花が咲いた。そんな中、水泳合宿での思い出がよみがえってきた。

毎年夏になると、高松市庵治町で体研生全員の水泳合宿が行われていた。水泳授業として先生方のご指導を受け、一週間の水泳の特訓である。海での水泳と言うこともあり、水任流の古式泳法を取り入れた授業であった。抜き手、立ち泳ぎ、浮き身、脚立からの飛び込み、和船の操櫓法、5kmの遠泳など、多くの種目に合格しなければ単位はもらえない。皆、一日中、真っ黒になりながら懸命に泳いでいたことが思い出される。また、休憩時間での先生方との交流や先輩・同輩等との語らいの中で、体育教師としての気構え、使命感、責任感等、教師としての資質を多く学んだ気がする。

そんな水泳合宿の中で、とりわけ印象に残っている事がある。一日の水泳練習が終わり、夕食までの休息時間、先生から「足を洗いに行くぞ。」と声をかけられた。「足を洗う」とは、浜辺から合宿所までの間に、野菜・果物・日用品からお酒まで置いている小さなお店へ寄り道をする事である。そこで、先生方が買い置きしている一升瓶を開け、冷や酒を飲みながら、疲れを癒やすのである。声がかかると、4回生と決まっておき、私も「足を洗う」までになったのだと、光栄でとても嬉しかったのを記憶している。

先生方と酒を酌み交わす中で、色々なお話を聞かせていただいたが、今だに頭から離れない言葉がある。それは、「無用の学問」という言葉だった。これから、人間として、社会人として、教師として成長していくためには、学ばなくてはならない有用な学問がある。それだけでなく、無意味と思うもの、的はずれたもの、得にもならないもの等、一見、何の役にも立ちそうにない「無用の学問」にも興味を持って取り組むと、人生が豊かに楽しくなるという話だったと記憶している。

浅はかな私には、あまり深くは理解できなかったが、卒業してから50年近く、ずっと頭に残っている言葉である。今にして思えば、「無用の学を重んじよ。」という孔子の教えを教授してくれたのではないかと思っている。

私も、間もなく70代を迎える。今となっては、何が「有用の学問」か「無用の学問」か、どうでもいいと思っている。だが、時折、恩師の言葉を思い出しながら、何を学ぶかを自分で決め、有用か無用かの結果は自分自身で負い、学び続けていければ、素敵だな～と思っている。